

「無事に生きる」

島根県 正禅寺しょうぜんじ住職 吉長 裕教ゆきちょう

「どうぞご無事でね」…微笑みながら合掌をして見送ってくれる祖母。「おばあちゃん、また来るけんね!」…そう言いながら手を振る私と妹亡くなった祖母を想う時、必ず思い出される場面です。

私は子どもの頃から、「無事」とは何事も無く平穏なことを言うのだと思っていました。ところが三十才の頃、ある老師が「誰の人生でも必ず何事が起こる。しかし、動じないことが一番大切なこと。その時に普段と変わらないよう過ごせる境地、それを『無事』と言うんだよ」とおっしゃったのです。これを聞いた時、私は祖母の言葉に込められた「願い」と「思い」を、理解できたように感じ、祖母の微笑みを思い出しました。

私も、六十歳になるまで多くの人と出会い話を聴き、共に考えていくうちに「無事に生きる」ことが如何に困難なことを知りました。その上で「無事」とは、『人が本当の姿でいること』なのだと気付かされました。それは『ただ在るがままの自分であること』であり、『あるがままの自分でいられるようにすること』だと思います。

生きていけば逆風にさらされ、雨でびしょ濡れになることもあります。また人によく思われようと作り笑いをしたり、人に合わせようと自分を抑圧したり、本当の欲求を我慢することもあるかもしれません。自分の力量以上にできる自分を演じるのは、苦しいばかりです。「良いことが起こった、悪いことが起こった」と一喜一憂し、他人の言葉に振り回されるのではなく、どんな時でもどんな状態でも平気で生きていく毎日を過ごす「これが「無事」なのです。昨日は「無事」に過ごしましたか? 今日あなたが、どうか「無事」であります

ようご!」